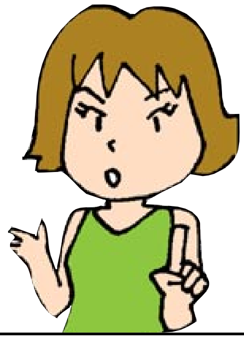
通学路の危険個所マップづくり



通学路でヒヤリハットした体験をみんなで話しあって地図にプロットしていくと、事故にあわないように気をつけるべき場所がわかるようになるよ。

まとめクイズ

Yes、Noのどちらかを選んでください

Q1. 小さなヒヤリハット体験を少なくしていくと、大きな交通事故も防ぐことができる。　Yes　No

Q2. ヒヤリハットする場所はみんな同じだから、人の意見を参考にする必要はない。　Yes　No

Q3. 多くの人がヒヤリハットしているが、これまでに交通事故が1件も起きていない場所は安全だ。　Yes　No

Q4. 自転車や歩行中の事故の約50%は、家から500メートル以内で起きている。　Yes　No

→解答は次ページに！

まとめクイズの解答と解説

Q1. Yes

1件の重大事故の背景には、29件の小さな事故があり、29件の小さな事故の背景には300件のヒヤリハット体験があるといわれています。研究した学者の名前をとって「ハインリッヒの法則」といいます。大事故を起こさないために、小さなヒヤリハットの場面をなくしていくことが重要です。

Q2. No

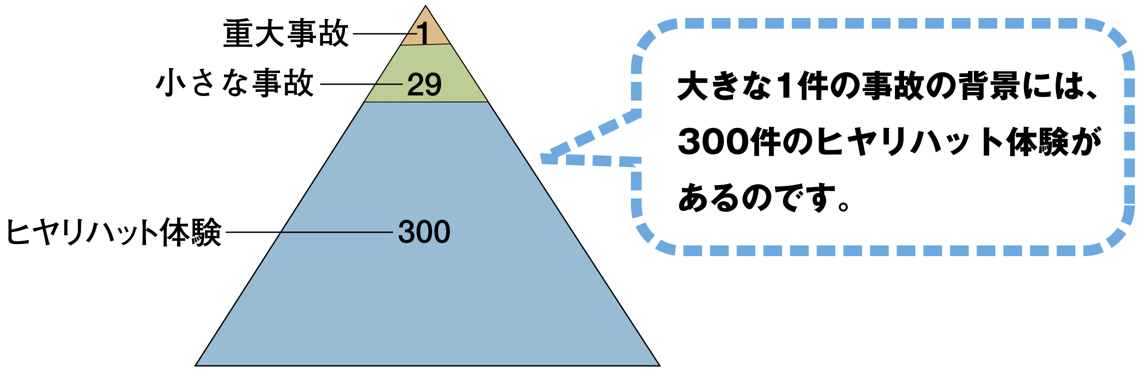
ヒヤリハット体験は、共通する部分もありますが、自分では今まで経験したことがなかったような場所でヒヤリハット体験をしている人もいます。互いに経験を話しあうことで、気をつけなければならない場所を知ることができます。

Q3. No

これまでに事故がなくても、ヒヤリハット体験をたくさんの人がしている場所は、これから事故が起こる可能性の高い場所です。みんなで事前に事故を防ぐ対策を考えてみましょう。

Q4. Yes

歩行者や自転車事故は、身近な場所で起きているということです。高校で危険個所マップを作った経験を、住んでいる地域の小学生やお年寄りにも広げる活動をすると、地域の事故を減らすために効果があがるはずです。



ハインリッヒの法則

コラム 1

危険個所マップをもっと有効に活用するために

みんなで作る「危険個所マップ」づくりの次のステップとして、実際に事故が起きた場所を示す「事故マップ」をつくって、2つを比べてみましょう。以下の3つのパターンがあることがわかります。

1. ヒヤリとしている場所で事故が起きているケース
   危険個所として覚えておきましょう。
2. ヒヤリとしているけれど事故が起こっていないケース
   事故が起きる可能性の高い場所として、意識して通過します。
3. ヒヤリとしていないのに事故が起こっているケース
   ヒヤリとしていれば注意しますが、ヒヤリとしていないのに事故が起きているため、とくに注意が必要な場所です。

調べてみよう
考えてみよう

新聞や本などの資料、インターネットなどを使って、調べて考えてみましょう

- **学校で話しあってヒヤリハット体験が多かった場所で、交通状況を観察してみましょう。危ない場面を写真にとったり、ビデオで交通状況を一定時間収録するのもいいでしょう。**

- **撮った写真や映像を見ながら、ヒヤリハットを防ぐ方法を話しあってみましょう。**

- **家族にもヒヤリハット体験を聞いてみましょう。**

MESSAGE

高校生の危険マップづくりを地域のボランティア活動につなげよう

鈴木春男　自由学園最高学部長　千葉大学名誉教授

高校生の危険個所マップ作りは、自分たちが上げた成果を、地域の高齢者や小、中学生に伝えていくところまで行うことは大変よいことだと思います。

高齢者を例に取れば、事故の現状を高齢者に説明することを通して、「高齢者の事故を減らすための交通安全教育をする」という役割が与えられます。説明のさい高齢者から交通ルールなどの質問が出たときに答えられないとまずいので、高校生自身の勉強になります。同じ手法で、高校生が、小学生や中学生を対象にも活動ができます。

また危険個所マップを作って警察や道路管理者へ危険個所の改善提案をする、ということも考えられます。

「今自分たちの周りの問題で何が重要なのか」ということを高齢者や小・中学生に発見してもらうことが大事です。危険マップ作りは、その動機付けにもなります。